

学校運営協議会議事録

校名	府立 和泉支援学校
(准)校長名	竹内 功

開催日時	令和 5年 2月 8日(水)10:00 ~ 11:50
開催場所	校長室
出席者(委員)	藤井会長、石田委員、西川委員、永井委員、桃田委員
出席者(学校)	竹内校長、大原教頭、向山教頭、事務長、東首席・高等部主事、米田教諭・中学部主事、山本(幸)首席、山本(昇)首席、山本(真)教諭・小学部主事
傍聴者	高等部梅北教諭、中学部高岡教諭
協議資料	令和4年度 第3回 学校運営協議会次第 令和4年度 学校経営計画 令和4年度 授業参観アンケート集計結果 令和5年度 学校経営計画(案)
備考	

議題等(次第順)

- (1)令和4年度学校経営計画の達成状況について
- (2)学校教育自己診断について
- (3)授業アンケートについて
- (4)令和5年度 学校経営計画(案)について
- (5)その他

協議内容・承認事項等(意見の概要)

- (1)令和4年度学校経営計画の達成状況について 承認
- (2)学校教育自己診断について 承認
- (3)授業アンケートについて 承認
- (4)令和5年度 学校経営計画(案)について 承認

<意見等>

(1)について

・特別支援学校で、これまでの感染症対策を行う上での課題であったり、国からはまだ提示されていないが、2類から5類に変わることによって予想される課題について何かありますか。

→感染症対策については、府教委のガイドラインに則り、加えて本校の特性に応じた対策を行ってきた。今後については、一つは不安感の払拭が必要である。そのために、児童生徒、保護者、教職員に対して、科学的根拠(学校医の意見等)の提示をし、当事者の納得を得る。二つめは、消毒の徹底。今後もスクールサポートスタッフが継続されるため、消毒の徹底を図る。三つめは、保健教育の中で、従来の様式にもどす指導を行っていくことが考えられる。

(2)について

・学校教育自己診断(教職員)の結果の、教職員の労働環境の改善で、ストレスチェックの回答率が低いのと、診断結果を見るとストレスが溜まっているのではないかと思う。支援学校独特のストレスが溜まりやすいのは、どういった年齢層が高くでているのか？

→年齢層までは、把握できていないので、調べた方がよいかもしれない。支援学校の経験年数も関係しているかもしれない。

・労働環境の改善について、何か対策をしているのか？教員にストレスがあると、当然子どもに影響がでると思うので。

→仕事の軽重(集中度)が均一でない。仕事が集中する人がいる。子どもの発達が段階的に進まない。チームで授業するため、共同歩調をとらなければならないため、ストレスがかかる。仕事量を減らす必要があるが、どこを減らすのが難しい現状である。何か良い方法があれば意見いただきたい。教員数が増えれば良いが、増えないので。

・教員数は、多いように見えるが、率からすると少ないのか。

→多いように見えますが、少ないです。

・小、中学校は35人に1人と決められているが、特別支援学校においては、障がいの程度に応じて加配教員がつくが、校長の裁量によって動いている部分がある。人数イコール教員数がでないのが特別支援学校である。他府県でも、教員配置のところで、融通はきかせているところはあるが、もとの数を増やすことが難しい。そういうところが影響しているのではないか。国は3割しか出しておらず、残りの7割が府が出している。国が教員数を増やせと言っても、7割を府がださないと増えない。教育委員会ではなく、知事部局の考え方に左右されるため、大幅な教員数増は望めないのではないか。

- ・和泉支援は教室の不足はないのか。→不足している。
- ・特別支援学校のもう一つの課題が、教室が足りないことである。設備のことでお金が必要になっている。特別支援学校は子ども一人に対してかかる税金が小中学校の10倍かかっている。特別支援学級は3倍かかっている。昭和54年の義務化から、各都道府県庁としては税金をかけてがんばっているところである。小中学校も教員が不足しているので、特別支援学校にまわしてもらえるかというところ難しい。

事情を様々なところに発信していただくしかない。

- ・「16 学校運営に教職員の意見が反映されている」の数字が44.1%というところが気になる。

→この項目を設けていない学校が多い。本校ではあえて設けている。学校運営について教職員に対し、もっと知らせることが必要であるというふうに受け止めている。

(3)について

- ・様々な学校に関わっているが、アンケート結果の数字が非常に高い。地元の小学校中学校に関わっているが、特に「お子さんは、意欲的に課題に取り組めましたか。」の項目は、小学校では4割5割の肯定率である。低学年では、40分授業を受けてられず、15分が精一杯である。
- 支援学校の授業は、個々の児童生徒に合わせた授業を行っていく。途中で気分転換が必要であったり、トイレ指導があるとか、実態にあわせた授業であるため、肯定率が高いのではないかと考えられる。
- ・保護者の中には、教員に気がつかず本当の思いを書かずに出しているところもあると思う。また、授業によっては、出さないこともある。
- ・20年前の時代は、教員への気遣いから厳しい意見を言わずに過ごしてきたが、現在では、小学校中学校の保護者の中には、厳しい意見を言われる保護者もいる。今の時代は、お互いに考えていかなければならないところがあるので、子どもを中心に、子どもに寄り添っているか、両者がそこから始める必要がある。中学校では、多様な生徒がいる。生徒が様々な思いを表現しているのを、周囲がどう理解しているか、保護者も教員も理解がうまくいっていない場合がある。神奈川県特別支援学校高等部の先生方は高等学校の生徒指導についての助言を希望していた。高等部の生徒指導上の問題が、全ての特別支援学校で話題となっていた。子どもたちの思いに寄り添った就学先決定がされていないのではないかと考えている。中学校の自閉情緒の支援学級の生徒は、態度の悪さから話を聞いてもらえていない。様々な思いがあって、態度が悪くなっているのに、態度が悪いところから入る教員が増えてきている。
- 子どもの言動に寄り添った指導をする教員が少なくなっている。先日参観した本校中学部の授業では、小学校でいじめられてしんどい思いをしていたが、支援学校に入学し安心して自分を表現できるようになり、凄く元気になったと、自分を見つめなおした授業に取り組んでいた。子どものだしてくる暴力的な言動を、どういふに教員が受け取るかが大切である。まずは、保護者と教員の関係ができることが必要。関係ができてから、意見を言うようにする。
- 保護者の中には、教員との関係作りが上手でない方もいる。教員の中にも、婉曲的に意見を言われても、意図を理解が難しい人もいる。互いのコミュニケーションが大切である。
- ・保護者は授業の中で自分の子どもにどのように関わってもらっているか、うまく関わってもらっているかについての思いが強いので、授業の中で教員の関りが子どもにどのように影響しているか、うまくいっているかどうかを互いに話あいでできるようなことを考えてもらいたい。今回見せてもらった授業は大変良い授業だったので、すべての教員がそのような授業をすることで、保護者の意見もかわってくると思う。

(4)について

- ・デジタル教材の導入について、何か具体的に考えているのか。

→デジタル教科書の使用や教員が作った教材を学校全体で共有して使用していく。

- ・和泉市では、AIドリルを5教科において使用している。子どもの段階に応じた問題をAIが考えて出している。
- ・保護者の中には、ドリル学習がはいる子とはいらぬ子がいるということを知ってない方がいる。特別支援学校や特別支援学級での学習で大事なものは、直接体験がなければ身につくことが難しいということ。実際に物を作るとか、味わってみるとか、五感を使って身につける力が大切である。直接体験の学習の中で、国語的なこと算数的なこと社会的なことを学ぶことが特別支援教育の発進の内容なので、保護者にはドリル学習から入るのではなく、生活の中で使う学びから入ることを徹底することが大切である。そのことが就労へつながっていく。

次回の会議日程

日時	令和5年6月7日(水)10:00～
会場	校長室